

メッセージ

池田大作SGI会長

南インドで初の開催となる「法華経展」、まことに
おめでとうございます。

貴・マドラス大学は1857年9月5日に創立され
てより150周年の佳節を迎えられました。今日まで、
ノーベル賞受賞者、大統領をはじめ、綺羅星の如き幾
多の人材を輩出してこられた尊貴な伝統に、創価大学
の創立者として心よりの敬意と祝福を申し上げます。

ご多忙の中、ご臨席を賜りましたバルナラー州知
事に厚く感謝申し上げます。また、壮麗なるセネット
ハウス(評議会会館)を展示会場として提供し開催に尽力

してくださった皆さま、とりわけ、ラマチャンドラン
副総長、ランガーナータン教務部長、ゴバラクリシュ
ナン哲学部長に心より御礼申し上げます。

私は、恩師・戸田城聖先生の写真を携えて、会長就
任の翌年、1961年1月、インドへと旅立ちました。
香港、スリランカを経由して、マドラスの空港に到着
したのは、1月31日の午後5時のことでありました。
マドラスすなわち現在のチェンナイは、私にとって、
憧れの精神の大国・インド初訪問の第一歩を印した、
忘れ得ぬ天地なのであります。

貴国は仏教発祥の地であり、偉大な精神の源流の国です。私たちの精神の故郷であり、「大恩の国」であり、「師匠の国」であります。このたび「法華経展」の開催によって、この大恩に少しでもお応えできればと願っております。

その後、デリーを経由し、釈尊成道の地・ブッダガヤを訪れて、インドそしてアジアの人々の幸福と、人類の永遠の平和を祈ったことも、昨日のように鮮やかに思い出されます。

私は夕闇迫るガンジスのほとりに立ち、仏教をもつて世界平和に貢献していくためには、どのような方途があるかを思索しました。そして、そのための第一歩として、東洋哲学研究所という学術研究機関を設立しようとしたのです。

その第1の理由は、インドから世界に発信された平和と調和のメッセージであり、人類の精神的遺産である仏教、なかならず法華経を決して過去のものとして終わらせてはならない。文献学的、思想的、歴史的に研究を進め、その「普遍的価値」を明らかにし、未来

を創造する指標として人類に提示することが必要であると考えたからです。

第2は、民族、文化、宗教の差異を互いに理解し合い、ともに協力し合いながら、人類の未来のための「文明間対話」「宗教間対話」を推進する必要があると考えたからです。

翌年の1962年1月に東洋哲学研究所を設立し、本年度45年となりました。以来、各国の学術機関や専門家の協力を得て、これまでサンスクリットを中心とした法華経原典の写本を『旅順博物館所蔵 梵文法華経断簡——写真版及びローマ字版』を皮切りに、9点の「写真版」及び「ローマ字版」を「法華経写本シリーズ」として刊行し、世界の仏教学研究に寄与してまいりました。今後、さらに2010年までに4点の刊行を予定しております。

また、この法華経写本刊行事業と並行して進めてきたのが「法華経展」であります。ロシア科学アカデミー東洋学研究所のご協力をいただきながら、これまで、東京、オーストリア、ドイツ、インド・ニューデリー、



63枚のパネルでは「法華経と各国の文化・芸術」「法華経の7譬に込められたメッセージ」「仏教経典の材質と形態」などを、わかりやすく多角的に紹介した

スリランカ、シンガポール、タイ、香港、マカオで開催してまいりました。

法華経は人類の「大良薬」

さて、人類に平和と共存の智慧を送り続けた法華経の譬喩品では、この現実世界の様相を、炎に包まれている家——「火宅」と表現し、仏は苦悩と恐怖の炎に焼かれる民衆を救済するために、この娑婆世界に出現すると説かれています。

「三界は安きこと無し 猶お火宅の如し 衆苦は充滿して 甚だ怖畏す可し 常に生老 病死の憂患有り 是の如き等の火は 熾然として息まず」

21世紀に入っても、世界は核戦争の危機、地球温暖化に象徴される環境問題の中にあり、幾多の民衆が飢餓や貧困に呻吟し、地域紛争やテロは一向にやまず、「憎悪と暴力」の連鎖が続いております。

では、そのような「火宅」の根本的な原因は一体、どこにあるのか。法華経は、人間生命の内奥を深く探索し、「貪・瞋・癡」の「三毒」を見出しました。果て

しなく貪り求める欲望の心、エゴイズムや怒り、憎悪の心などの煩惱の火が、地球上に「火宅」の様相をもたらしめているのであります。法華経は、この人間生命の「三毒の火」を「智慧の光」へと転換する方途を示しました。

南インド出身の大乗仏教の大成者であるナーガールジュナ（竜樹）は、『大智度論』の中で、法華経の偉大さを、腕のよい医師にたとえ、次のように述べております。

「譬えば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」

つまり、もともと「毒」として作用する材料を巧みに調合することによって、患者の病を治す「良薬」として活用することができるという譬喩であります。ここでいう「毒」とは「煩惱」すなわち「悪性」を指し、「薬」とは「菩提」すなわち「善」を指します。

13世紀の日本の日蓮大聖人は、このナーガールジュナの解釈を受けて、さらに次のように述べておられます。

——「毒」とは煩惱道・業道・苦道の「三道」のこ

とであり、我々人間の生命の中の悪性と、悪い行為と、生老病死に象徴される苦悩の境涯のことである。

「薬」とは法身・般若・解脱の「三徳」のことであり、清浄で力強い仏の生命と、輝く智慧と、自由自在の大福運の境涯のことである。

人類の苦悩を救済する偉大な医者にたとえられる法華経には、この「三道」を「三徳」に転換し、その人のいる所を平和で安穩なる常寂光土に転換していく偉大な力が備わっている——と。

その力とは、法華経に示される「仏性（仏知見）」であります。暴力性とエゴイズムと無明にとらわれ、相争う「人間」自身の中に、実は本来、無限の幸福を創造する「仏性」が内在しているのであり、その力を発現させていくべきであると教えておられます。まさに法華経は、人類にとっての「大良薬」であり、偉大な「生命蘇生の法」なのであります。

このたびの「法華経展」では、多くの言語に翻訳されてきた仏教写本資料が展示されております。これらを通し、仏教写本がいかに長期間にわたって、広大な

地域で、さまざまな民族によって書写され、受け継がれてきたかを、ご理解いただけるでありましょう。

まさしく法華経は、無限の「希望の哲学」「幸福の哲学」「平和の哲学」であり、決して「過去の文化遺産」ではありません。人類の未来を照らす巨大な光源として、価値創造し続ける永遠の經典なのであります。

私は、この貴国の英知が再び全世界を照らし、人類の境涯を高めゆく「インド・ルネサンス」の光明を放ち続けていかれることを切望してやみません。

暗闇を照らす「光の花びら」

1995年、チェンナイで、私に世界桂冠詩人の称号を贈ってくださった世界詩歌協会会長のクリシュナ・スリニバス博士は、詩集『ブッダ——人間主義の勝利』の中で、法華経の魂を高らかに謳っておられます。

「仏は常に存在している。過去も、現在も、未来も。仏は言った。『私はいつもここに在って、法を広めている』」

如何なる時代にあつても、赤々と燃える自身を露わにして。

蓮華は、泥沼の中に根を張り、光り輝く花びらと共に輝く。

菩薩も、人生の喜びと悲しみの泥沼にあり。

灯台として赤々と燃え、暗闇の世界に光をもたらす」

最後に、世界に冠たる英知の殿堂である貴・マドラス大学の永遠なる栄光と、仏教大恩の故郷・インドの無窮なる平和と繁栄を心よりお祈り申し上げます。